

[A] 推古天皇(国内政治)ーテキスト P8 対応ー

古墳時代の最後、崇峻天皇は、自分のことを大王に擁立した蘇我馬子のことを「イノシシだ(言ってしまった)、ブタだ(言っていない)、デブだ(言っていない)」と言ったため、馬子に殺されてしまった。そのため、馬子は**推古天皇**という女性を擁立して天皇に即位させることにした。その推古天皇が**592年**に飛鳥**豊浦宮**で即位してから、710年に平城京に遷都されるまでの時代を飛鳥時代というんだ(なお、628年に推古天皇が崩御(死亡)した時の宮は、豊浦宮ではなくて**小墾田宮**という)。

でも、さすがに推古天皇は女性なわけだし、一人で政治を行っていくには限界がある。そこで、その翌年の**593年**に、仏教マニアで有名な自分の甥にあたる**厩戸王(聖徳太子)**を**摂政**に任命して(摂政は天皇が幼少や女性の場合に補佐する役職のこと)、**蘇我馬子**と**厩戸王(聖徳太子)**に政治を補佐させることにしたんだ。そして、その厩戸王は就任後すぐに、仏教マニアぶりを発揮している。それが594年に発布された、仏・法・僧の3つを興していきましょうっていう**仏法興隆の詔(三法興隆の詔)**なんだ。

ところで、少し考えてみよう。この当時の大王(のちの天皇)の権威ってずいぶんショボくないかな？だって、推古天皇の前の崇峻天皇なんて、臣下である蘇我馬子に殺害されちゃっているんだよ？これじゃあ、大王(のちの天皇)よりも蘇我氏の権力の方が上になってしまっているよね。だから、推古天皇も厩戸王も、何とかして大王家の権威をもう一度復活させなきゃいけない。そこで、大王家の権威を回復させるために、外交手段を利用しようと考えたんだ。

じゃあ、当時の中国・朝鮮半島の状況はどうなっていたのか？今までの中国は南北朝時代が続いていたけど、ようやくこの時期に北朝から出た**隋**という国家が589年に中国を統一した。そこで、この隋との外交をうまく展開して、それを成功させることで大王の権威回復、ひいては日本の国際的立場を向上させようと考えたんだ。そのため、この時期の外交目標とされたのは、今までの朝貢形式の外交ではなく、**対等関係の外交**とされたんだけど、これに関しては少し詳しい解説が必要なので今から説明していこう。

まず、そもそも隋という国は漢民族がつくりあげた国家だから、**中華思想(華夷思想)**に基づいて、他の国に対して朝貢を要求する**冊封体制**をとっている(中華思想・冊封体制については、「古墳時代」で解説したものをコピペしておく)。

＜中国と冊封体制＞

まず、そもそも中国人は他民族国家で、50近くの民族から成り立っている。中国の民族には、漢民族・女真族(満州族)・モンゴル族・チベット族・ウイグル族などの民族があるんだけど、その中でも9割以上の大多数を占めるのが漢民族なんだ。そして、その漢民族は**中華思想(華夷思想)**といって、「世界で一番優れている民族は漢民族である」という特殊な考え方を持っている。ここから、彼ら漢民族は、自分たちのことを世界の中心である「**中華**」と考えているんだ(中国という国名も、世界の**中心の国**であるという意味…何かムカつくけど)。そのため、漢民族以外の周辺異民族を、文化の遅れている野蛮な「**夷狄(蕃夷)**」とみなして、それぞれ東西南北に住む異民族を**東夷・南蛮・西戎・北狄**と呼んでいたんだ(『後漢書』東夷伝における「東夷」も、東に住む異民族の「倭」のこと指している)。

そこから、中国こそが一番の「中華」であり、それ以外の周辺諸国は中国よりも下の国である野蛮な国の「蕃夷(夷)」とみなし、「中国はそういった国の上に立つ国であり、それ以外の周辺諸国は中国に服属するために貢物をもってこい」と考えるんだ。そして、周辺諸国の中で宗主国である中国に朝貢をしてきて、それを中国が認めた場合、中国の皇帝がその国の王様に位階や称号を与え

て、その地域の支配を認めてあげるんだ。こうしたその国の王が支配地域を保障されることを「冊封を受ける」という(反対に中国側からすると「冊封を授ける」ということになる)。これによって、「中国は周辺諸国の上に立つ宗主国であり、それ以外の周辺諸国は中国に服属する属国」という形式的な主従関係が成立するんだ。こうした中国と周辺地域の国の形式上の君臣関係で形成された国際秩序のことを冊封体制という。

こうした冊封を受けると、その国は形式上中国に従属することになるんだけど、その代わりにメリットがある。まず、中国皇帝の権威を借りて国内の政権を安定させることができること。つまり、国内の家臣たちや、外国に対して「俺は中国皇帝からこの国の支配を任せられた王様なんだぞ」と示すことができるわけだ。それから、もう一つが中国の経済や文化などの交流を認められることによって、先進国である中国の品物や文化をゲットできるということだ。

さて、漢民族による隋は、「冊封体制ははじめました」的なノリで、朝鮮半島にある新羅や百済・高句麗に対して朝貢してくるように要求した。だから、新羅と百済はあわてて隋に使いを派遣して、冊封体制に従い隋に従属したんだ。ところが、高句麗は騎馬民族であり朝鮮半島では相当強大な国だ。そのため、高句麗は表面的には隋に朝貢したんだけど、裏ではまったく従ってはいなかったんだ。ゆえに、隋の皇帝からしてみれば放っておけるものではない。そこで、その高句麗を征伐するために遠征軍を送ることを計画していたんだ。

これが、この当時の大陸の情勢。じゃあ、日本はどうすればいい？一番簡単な方法は、隋に服属する形をとること。でも、そんなものでは大王の権威も日本の国際的立場も向上するわけがない。そこで、あえて隋に対等関係を要求することで、その立場を向上させようと考えたんだ。

でも、「そんなことしたら隋の皇帝にどやされちゃうんじゃないの？」と思うでしょ？確かにその通り。当然隋の皇帝もブチ切れるだろうね。ところが、隋は日本の要求を黙認せざるをえない状況にあるんだ。それは何故か？隋が日本の要求を断ったら、当然日本は隋と敵対することになる。そうなると、隋が遠征を計画している高句麗と、その日本が手を組んでしまう可能性が高い。そのため、隋としてみれば高句麗遠征を成功させるためには、敵を増やしたくないわけで、日本との関係を悪化させるわけにはいかなかったんだ。つまり、隋と高句麗の敵対関係を利用しようとしたわけだね。

では、この外交が成功した場合の日本のメリットは？まず、隋と対等ということになれば、それだけ国内の豪族たちの評価が変わる。「大王はあの隋の皇帝と対等関係を成功させたのか！」と国内の諸豪族に大王の権威を示すことができる。ところが、それだけじゃない。日本が隋と対等関係を築くことができれば、隋に服属している新羅や百済よりも日本が上の立場に立つことができる。つまり、百済・新羅<隋=日本ということになり、日本の国際的地位も向上することになるんだ。

そこで、隋との対等外交を展開するために、600年に最初の遣隋使が派遣されたわけだ。そして、その当時の隋の皇帝である文帝がいる隋の都長安にまで行ったんだけど、その時に文帝から「日本の政治制度とか風俗とかはどうなってるんだ？」という質問をされたんだ。それに対し、日本の使者がいろいろ答えたんだけど、「いやいや、それは違うぞ？日本の風俗や政治制度は間違っている部分が多い」って窘められてしまった。そのため、結局その使者は交渉に失敗して602年に帰ってくることになるんだ。

でも、これは恥ずかしいよね。一国の使者として派遣したにもかかわらず、相手の国の皇帝に窘められて帰ってきたわけだから。そのため、この600年の遣隋使に関しては、中国の『隋書』にはその記録が残っているんだけど、日本の史料にはいっさいその内容が書かれていないんだ。つまり、そんな国の恥ずかしい内容は国の歴史書に書くわけにはいかなかったわけだ。ただ、中国の『隋書』にはその内容が記されているわけだよね。そこで、その史料を見ていこう。

□ 600 年の遣隋使の派遣(第 1 次)『隋書』倭国伝 by 魏徴

開皇二十年倭王あり、姓は阿每、字は多利思比孤、阿輩雞彌と号す。使を遣して闕に詣る。上、所司をして其の風俗を訪はしむ。……

(開皇二十年(600 年)、倭王がいた。姓は阿每、名は多利思比孤といい、阿輩雞彌(大王)と名乗った。(その王が)使者を闕(隋の都長安の宮廷)に派遣してきた。上(文帝)は、役人に倭の風俗について質問をさせた。)

…この史料の後の内容は省略してあるけど、この後の内容を簡単に紹介しよう。日本の使者に対して、隋の文帝が「日本の風俗はどうなの？」って尋ねたんだけど、その使者は「天を兄とし、日を弟としています」って答えたんだ。ところが「そいつは違うな〜」って文帝から諭されちゃったんだ。そして、彼ら使節は 602 年に日本に帰ってきて、そのことを大王らに報告した。「私たち日本はまだ制度などが整っていないと文帝から諭されちゃいました。ですので、一刻も早く国の制度を整える必要があります。」とね。

だから、一刻も早く国家制度の整備を行わなければならない。そのため、603 年に冠位十二階の制、604 年に憲法十七条と矢継ぎ早に国家制度が整えられていったんだ。

では、まず前者の冠位十二階から説明しよう。今までの朝廷の役職には、世襲制を原則とする氏姓制度に基づいて、豪族などの家柄に応じて役職が与えられてきた。でも、その家柄を重視して役職に任命すると、能力がないにもかかわらず高い役職になってしまう可能性がある。能力のない人間が高い役職についていたら、国家の政治もうまく機能しないよね。そこで、家柄にかかわらず個人の功績や能力に応じて役職に任命できるようにしたのが冠位十二階だ。これによって、今までの世襲制を原則としていた氏姓制度は形だけのものとして形骸化していったんだ(あくまでも形骸化しただけであって、廃止となったわけではなく、684 年には姓を再編した八色の姓が整えられた)。

では、具体的に冠位十二階の 12 階にはどのようなものがあるのか？これは徳・仁・礼・信・義・智という冠位をそれぞれ太小に分けて 12 階と定めたんだけど、…ちょっと具体的にわかりづらいよな？つまり、右の表のように、トップは大徳、2 番目は小徳、3 番目は大仁・4 番目は小仁、5 番目は大礼、6 番目は小礼、…そして一番下が小智ってこと。だから、入試問題では「冠位十二階で 9 番目に偉い冠位を書け」とかいった問題が出されたりもするんだけど、その場合には「大義」とか書けばよいわけだ。

徳 仁 礼 信 義 智	①大徳	②小徳
	③大仁	④小仁
	⑤大礼	⑥小礼
	⑦大信	⑧小信
	⑨大義	⑩小義
	⑪大智	⑫小智

ただ、こういうと必ず質問があるんだよね。「じゃあ、蘇我馬子とかはどんな位をもらったんですか？大徳ですか？」いいえ、馬子とかの上級豪族はその対象外なんだ。つまり、冠位をもらう側じゃなくて、冠位を授ける側だったわけだ。

これによって今までのように豪族だけじゃなくて、能力のある人間が役人になれるようになったわけだね。ところが、こうした新しく任命された役人が好き勝手に乱れた政治を行ってしまう可能性もある。そこで、こうした役人が守るべきルールを定めたんだ。それが憲法十七条。だから、これは憲法っていう名前がついているけど、憲法みたいなものじゃなくて、役人に対して役人の守るべき訓戒をまとめたものなんだ。まあ、簡単にいえば、役人に対するルールブックってところだね。

こうした憲法十七条によって、今まであくまでも豪族にすぎなかった者たちに対して、役人としての心構えを説いて、国家の官僚(役人)としての意識を植え付けようとしたんだ。だから、論述用に述べるのであれば、「豪族を国家の官僚とし、従来の組織を再編する」ってことになる。

さて、その内容は全部で 17 条あるわけだけど、その中で代表的なものが「第一条=和を尊重すること」「第二条=三宝(仏・法・僧の)を敬うこと」「第三条=天皇に服従すべきこと」の 3 つだ。そうしたら、その内容を史料で見よう。

四 憲法十七条『日本書紀』

(推古天皇十二年) 夏四月丙寅の朔戊辰、皇太子、親ら肇めて憲法十七条を作りましたまふ。

一に曰く、和を以て貴しと為し、忤ふること無きを宗と為よ。人皆党有り、亦達れる者少し。是を以て或は君父に順はず、乍た隣里に違ふ。然れども、上和らぎ下睦びて、事を論ふに諧ひぬるときには、則ち事理自らに通ふ。何事成らざらむ。

二に曰く、篤く三宝を敬へ。三宝とは、仏・法・僧なり。……

三に曰く、詔を承りては必ず謹め。君をば則ち天とす。臣をば則ち地とす。……

十二に曰く、国司・国造、百姓に斂ること勿れ。国に二君なく、民に両主なし。……

(推古天皇の12年(604年)夏、4月3日に皇太子(厩戸王(聖徳太子))は自らはじめて憲法十七条を作られた。

一、すべて和を尊び、人に逆らわないように心がけよ。人には仲間があるが、理を悟っている者は少ない。

それで、或は君主や父の命に従わず、また隣近所とも仲良くいかない。しかし上下の者が互いに仲良く親しみあい、意見を十分に述べ合えば、道理が自然に通じ合って、すべての事がうまくいく。

二、深く三宝を敬え。三宝とは仏と、その教えである法と、教えを説く僧である。

三、詔(天皇の命令)を受けたらば、必ず心から謹んでこれに従え。君(君主)とはすなわち天のように高く、臣(家臣は地のように天の下にあるべきものである。

十二、国司や国造は、国民から勝手に収奪してはならない。国に2人の君主はなく、また民に2人の主人はない。)

…この史料を見てもらうとわかるけど、この憲法十七条は仏教に関する内容が多く、仏教の影響力が相当強いよね。これは、この当時の厩戸王(聖徳太子)を中心に、仏教中心の政策が推し進められていったことが背景にあるんだ。そこで、こうした仏教政策など、この当時行われた一連の政策を見ていこう。

まず、厩戸王(聖徳太子)は自らが摂政になった翌年の594年に、仏法(三宝)興隆の詔という詔を出していたよね。そして、これ以降仏教を流行らせようとしていったわけだけでも、仏教の深い真理なんて凡人にわかと思う？そもそも、仏教を学ぶためには、仏教の教えが書いてある經典を勉強しなければいけない。でも、經典なんて普通の人間が読んだらクソ難しすぎて、何を言っているのかほとんどどの奴がわかんないよね？そこで、その仏教の經典が何を言っているのかわかりやすいように、厩戸王(聖徳太子)が書いてあげたのが『三経義疏』という經典の注釈書だ(「疏」を「疎」にしないように気をつけてね)。

これは法華經・維摩經・勝鬘經という3つの經典の内容をわかりやすく解説した書物。まあ、正確に述べると、法華經の注釈書のことを『法華經義疏』と言って、維摩經の注釈書を『維摩經義疏』、勝鬘經の注釈書を『勝鬘經義疏』って言って、それら3つを合わせて『三経義疏』って言うんだけどね。ちなみに維摩經と勝鬘經に関しては、昔慶應大学で書かせたことがあるけど、基本的にはほとんどが選択問題だ。

この『三経義疏』を書いた人物が厩戸王(聖徳太子)なわけだけど、さすがに一人で仏教を学んだわけじゃない。そりゃ、厩戸王(聖徳太子)にだって仏教を教えた師匠がいるんだ。それが高句麗の僧であつた惠慈という人物だ(この時期には暦・天文学を伝えた百濟の観勒や、紙・墨・絵具を伝えた高句麗の曇徴もいるので、文化史の内容だけでも一緒に覚えておこう)。

一方で、この厩戸王(聖徳太子)は蘇我馬子と協力して国の歴史書も編纂している。それが、『天皇記』・『国記』の2つだ。この二つは国史、つまり国の歴史書として編纂されたものなんだけど、何でわざわざそんなものを編纂するんだろう？これは、国の歴史書を書くことによって、大王が日本を支配している正統性を示そうとしたんだ。つまり、「日本という国は、そもそも大王の先祖である天照大神がおつくりになったものである。そして、その天照大神の子孫が大王家なのであるから、大王家が日本のトップにいるのは当たり前のことである」という内容を歴史書に書けば、これ以降も大王が国を支配していく確かな根拠になるっていうことだ。ちなみに、この『天皇記』・『国記』はその後蘇我

氏の邸宅に保存されていたんだけど、645年の乙巳の変で蘇我氏が滅亡しちゃった時に一緒に焼けちゃったので現在は残ってないんだよね。

[B] 推古天皇～舒明天皇(対外交渉)ーテキスト P8 対応ー

こうした冠位十二階や憲法十七条が制定されたことにより、ようやく国内の整備が整った。これで隋に使者を送っても、昔みたいに窘められることもないでしょ？そこで、**607年**(隋の年号では**大業三年**)に**小野妹子**を遣隋使として派遣し、その小野妹子が推古天皇からの国書を隋の皇帝**煬帝**に提出したんだ。ところが、その煬帝に提出した国書の内容がまずかった！その国書には「日出づる処の**天子**、書を日没する処の**天子**に致す。恙無きや(日が昇る東側の国の王様である**推古天皇**から日が沈む西側の国の王様である**煬帝**に手紙を送ります。お元気ですか。)」と記されていたんだけど、どこがまずいんだろう？

まず、「日出づる処(太陽が昇る)」というのは東側だから、東側の日本を指している。一方、「日没する処(太陽が沈む)」というのは西側だから、西側の中国を指してる。だから、この「日出づる処」と「日没する処」の部分は問題なし。ところが、一番まずい言葉があったんだ。それが「**天子**」という言葉だ。この「天子」は王様という意味。だから、煬帝からしてみれば「ちょっ、ちょい待てや。何で天子が二人もいるんだ、こら。この世に天子ってのは俺一人だけなのに、何で日本の野郎までが天子なんて名乗ってやがるんだ。」ってブチ切れちゃったわけ。ちなみに、時々「日出づる処の天子」を「日の出の勢いの国」、「日没する処の天子」は「日が沈むような国」と教える人がいるけど、それは小学生用に教えたりする時の間違いだよ。

図 607年の遣隋使の派遣(第2次)『隋書』倭国伝 by 魏徴

大業三年、其の王**多利思比孤**、使を遣して朝貢す。使者曰く「聞くならく、**海西の菩薩天子**、重ねて**仏法**を興すと。故、遣して朝拝せしめ、兼ねて沙門數十人、来りて仏法を学ぶ」と。その**国書**に曰く「**日出づる処の天子**、書を**日没する処の天子**に致す。恙無きや、云々」と。**帝**、之を覽て悦ばず、**鴻臚卿**に謂ひて曰く、「蛮夷の書、無礼なるもの有らば、復た以て聞する勿れ」と。**明年**、**上**、文林郎**裴世清**を遣して倭国に使せしむ。……

(**大業三年(607年)**、その王(倭国の王)**多利思比孤(推古天皇)**が**使者(小野妹子)**を送って朝貢してきた。使者が言うには、「**海西の菩薩天子(煬帝)**様が、**仏法**を重んじていると聞いております。そこで、使者を派遣し、同時に僧侶數十人を、仏法の研究をさせるため派遣してきたのです」と。(使者が持ってきた)その**国書**には「**日出づる処の天子(太陽の昇る東側の国の天子＝推古天皇)**が**日没する処の天子(太陽の沈む西側の天子＝煬帝)**に手紙を送ります。お元気でしょうか」と記されていた。**帝(煬帝)**は、この国書を見て不機嫌になった。**鴻臚卿**(外交官)に「野蛮な国の国書に無礼なものがあった。あのような無礼な国書は二度と私に見せるな」と命じた。(しかし、隋は**高句麗**征討を控えていたため、高句麗が倭国と結びつくの恐れ)、**明年(608年)**、**上(煬帝)**は、文林郎**裴世清**を倭国に使者として派遣した。)

そのため、小野妹子は「やべ～、下手こいちゃった…。これは失敗したかな」って思ったんだけど、その後に煬帝から日本との国交を黙認する知らせが届いたんだ。さて、それは何故だろう？それは先ほども述べたように、隋は**高句麗**遠征を控えていたよね。だから、日本がこれでブチ切れて高句麗側にまわっちゃったら厄介だと考えて、その国書に対する返答の使者として**裴世清**という役人を日本に送ったんだ。ちなみに、文林郎ってのはこの裴世清の位のことだ。

そして、翌年の**608年**に、この裴世清と一緒に小野妹子が翌年に帰国してくる。ただし、これは翌年の608年だから、607年の同年のことじゃないから正誤問題で気をつけてね。そして、その裴世清が推古天皇に煬帝からの国書を持ってきて、その国書には「対等外交は認めないけど、国交は結んで

やろう」という返事が書いてあったんだ(その国書は「天子」の内容などを答める返事だったので、日本は百済にその国書を奪われたということにして、公開することはなかった)。これで隋との国交が開かれたわけだから、日本が更に国家整備を進めるために、隋の文化を公然と学びに行くことができる。そこで、**608年**に小野妹子を遣隋使として再び派遣したんだ。

なお、608年の遣隋使では、この小野妹子と一緒に、隋の文化を学ぶために留学生や学問僧が共に派遣されている。それが**留学生**の**高向玄理**。それから、**学問僧**の**南淵請安**、そして**曼**だ。そして、この608年の第三次遣隋使は再び煬帝に謁見して推古天皇からの国書を渡している。その国書に書かれてあった内容は「**東の天皇**、敬みて**西の皇帝**に白す(東の天皇**推古天皇**が、敬意を表して西の皇帝**煬帝**に手紙を送ります)」。ここで、面白いことに気づくかな？先ほどの607年の第2次遣隋使では「天子」という語句で煬帝が怒っちゃったでしょ？だから、今度は「天皇」と「皇帝」という言葉を使い分けたわけだ。ちなみに、この608年の第三次遣隋使の内容も史料があるんで見ていこう。

図 608年の遣隋使の派遣(第3次)『日本書紀』

(**推古天皇十六年**)夏四月、**小野妹子**、大唐より至る。唐国、**妹子**臣を号けて蘇因高と曰ふ。即ち大唐の使人**裴世清**、下客十二人、**妹子**臣に従ひて、筑紫に至る。……秋八月辛丑の朔癸卯、唐の客、京に入る。……(九月)辛巳、唐の客**裴世清**、罷り帰りぬ。則ち復**小野妹子**臣を以て大使とす。……唐の客に副へて遣はす。爰に天皇、唐の帝を聘ふ。其の辞に曰く、「**東の天皇**、敬みて**西の皇帝**に白す。……」と。是の時に、唐の国に遣はすは学生倭漢直福因・奈羅詔語恵明・高向漢人**玄理**・新漢人太閤、学問僧新漢人**日文**・南淵漢人**請安**・志賀漢人慧隱・新漢人広濟等、并て八人なり。

(推古天皇十六年(608年)夏4月、**小野妹子**が隋から帰国した。隋は**小野妹子**に蘇因高という中国名を与えた。隋の使者**裴世清**と供の者12人が**小野妹子**に案内されて筑紫にきた。…秋8月に隋の使者裴世清は飛鳥に到着した。…9月11日、隋の使者である**裴世清**が帰国した。そこで、再び**小野妹子**を隋に派遣した。……そのとき、天皇は煬帝へのあいさつの書の中に「**東の天皇(推古天皇)**がつつしんで**西の皇帝(煬帝)**に申し上げます…」と記した。このとき、隋の国に派遣された留学生は倭漢直福因・奈羅恵明・**高向玄理**・新大閤、留学僧は**曼**・**南淵請安**・志賀慧隱・新広濟らで、合わせて8人である。)

これ以降、隋の文化を学ぶために遣隋使が派遣されるんだけど、何とその遣隋使は614年に派遣された**犬上御田鍬**の第四次遣隋使を最後に派遣されなくなってしまう。何でかっていうと、それは単純な話。その後の**618年**に隋が滅んで唐が建国されちゃったので、614年の遣隋使が最後の遣隋使になってしまっただけだ。

では何故、隋はこんなにも早く滅亡してしまったのだろうか？それは、さっきも説明したように、隋って高句麗遠征を計画してたよね？そして、それを実行に移したんだけど、その高句麗が強いんだよね。彼らは根っからの騎馬民族だから。結局3回とも**高句麗遠征**に失敗してしまったため、逆に中国国内で煬帝に対する不満が高まって、結局618年に唐によって滅ぼされてしまったんだ。

こうして、新しく唐という漢民族による国家が建国されたんだけど、この唐に関しても漢民族のつくった国。だから、**冊封体制**をとり周辺諸国に朝貢をうながしたんだ。そのため、百済・新羅はこの唐に服従するわけだけど、唯一心服しない国があった。それが前の隋の時にも内面的には従っていなかった高句麗。だから、唐も**高句麗征服**、そして**朝鮮半島の征服をめざす**ことになったんだ。

ところが、前の隋はその高句麗遠征で失敗して滅びちゃってるわけでしょ？だから、さすがに同じことを繰り返したら隋の二の舞になる。だから、唐は高句麗遠征に関してはすごい慎重なんだ。この高句麗を滅ぼすためには、前の隋なんかよりも強力な国家を築きあげなければいけない。そこで、高句麗遠征を行う前に、ちゃんと国の整備を整えて、**中央集権国家**という強力な国を築きあげたんだ。

…って、中央集権国家なんて難しいこと言っちゃったよね。少し中央集権国家というものが何なのか説明しよう。「中央集権国家」というのは、「中央」の政府に「権」力が「集」まっている「国家」のこと。ちなみに、これの反対語って知ってるかな？「中央集権国家」の反対語は「地方分権国家」

って言うんだ。この「地方分権国家」とは、「地方」に「権」力が「分」散している「国家」のこと。つまり、中央にいる皇帝だけじゃなく、地方にいる豪族層たちがそれぞれ権力を持っているということだ。ところが、この「地方分権国家」だと、国の方向性がまとまらないという問題点があるんだ。例えば、王様が「国の軍事力を高めるためには徴兵が必要だ！全国から兵隊を集めろ～！」と命令したとするとでしょ？ところが、地方の豪族層たちが「知らねえよ。俺たち地方の豪族は豪族で軍事力が必要なんだよ。だから、兵隊なんて差し出さねえよ」って反発したりしてしまうんだ。こうした「地方分権国家」のように、権力が二つ以上に分かれていると、国の方向性がバラバラになってしまい、国を強くしづらい。それに対して、「中央集権国家」の場合は、国のトップに権力が集まっているから、国の方向性を一つに統一しやすいんだ。例えば、王様が「国の軍事力を高めるために徴兵するぞ～」って言ったら、各地の人間たちは逆らうことはできず「はは～！」って従うわけだ。こうした「中央集権国家」を確立したことによって、唐は強大な国家を作り上げていったんだ。

こんな強力な唐に対しては、日本も対等外交なんて出来るがわけない。対等外交なんて要求したら簡単に滅ぼされてしまうからね。そこで、630年に初めての遣唐使として^{いぬがみの み た すき}犬上御田鍬が派遣されるんだけど、この時は儀礼的な朝貢形式をとったんだ。ちなみに覚え方は“ロミオ(630)も行ったよ、遣唐使”。ただし、この630年の遣隋使が派遣された時の天皇は推古天皇ではなく、^{しよめいてんのう}舒明天皇に代わってしまっているのが気をつけて(特に舒明の「舒」の左側は「舍」ではなく「舍」という字なので気をつけるように)。何で舒明天皇に代わってしまったかという、単に推古天皇も皇太子であった厩戸王(聖徳太子)年で死んじゃっただけです。

そして、この630年に派遣された遣唐使が632年に帰国してくるわけだけど、その時に一緒に帰ってきたのが、先ほど遣隋使として中国に渡っていた^{みん}受。そして、その8年後の640年には、同じく中国に渡っていた^{たかむのくろまろ}高向玄理と^{みななみのしやうあん}南淵請安も帰ってくるんだ。まあ、これらは最難関私大レベルだけだね。

こうした中国から帰国してきた彼らは、中国で学んできたことを伝える役割を果たすんだけど、この中で南淵請安は自らの塾を開いて、唐の国家体制などを国家の要人たちに教えていったんだ。その南淵請安の塾に通っていた人物が、蘇我馬子の孫である^{そがのいるや}蘇我入鹿(蘇我蝦夷の子)や、^{なかのおおえのおうじ}中大兄皇子、^{なか}臣鎌足などだ。ここで中大兄皇子と中臣鎌足が知り合うことになるんだけどね。

そして、南淵請安は彼らに今現在の中国の体制とか朝鮮半島の様子を話していくんだ。「現在の唐は中央集権国家を樹立していてめちゃめちゃ強いんです。しかも、唐に臣従しない高句麗に対して、攻め込む準備をしているので、近いうちに朝鮮半島では新羅・百済をも巻き込んだ大きな戦争が起きるでしょう」と、情勢を伝えていくわけだ。

そうすると、彼ら生徒からしてみればめちゃめちゃ焦るよね？唐と高句麗で戦争が起きたら、それが朝鮮半島の百済・新羅にも広がるのは確実だ。なおかつ、日本はその百済と友好関係にあるわけだから、日本にも影響が出てくる。そして、一番の問題はもし戦争に巻き込まれた場合、日本はそれに勝つことはできるだろうか？ということ。…このままでは勝てるわけないよね。だから、一刻も早く強力な国家にするために、日本も中央集権国家にする必要があったんだ。

じゃあ、その当時の日本は「中央集権国家」だったのか、それとも「地方分権国家」だったのか？当時の日本は後者の「地方分権国家」だ。地方に権力が分散しているわけではないけど、権力の所在は大王家と蘇我氏という二つに分散しているよね。ゆえに、日本はまだ中央集権国家などではなく、権力が分散している地方分権国家に過ぎないわけだ。だから、中央集権国家にするためには国を一つにまとめなきゃいけないんだ。

だから、天皇家の人間、つまり中大兄皇子からしてみれば早く蘇我氏を倒して、天皇家中心の中央集権国家にしたい。それに対して、蘇我氏にしてみたって蘇我氏を中心にした中央集権国家にしたいわけだよ。ただし、さすがに天皇は殺せないよ？天皇殺したら皆から反感買っちゃうでしょ？だから、天皇に能力のない人間を就けて、裏で蘇我氏が操ることで権力を集中させようと考えたんだ。

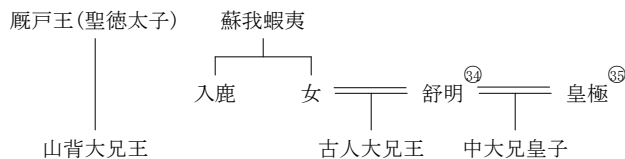
だから、今までの天皇にも推古天皇や舒明天皇などの政治能力の低い人間を天皇に擁立させてきた

わけだ。ところが、そんな肝心な時に舒明天皇が死んでしまった。そこで、次の天皇后継者を決めなければいけないんだけど、その時の有力な後継者であったのは、厩戸王(聖徳太子)の子の山背大兄王という人物だったんだ。でも、山背大兄王は厩戸王(聖徳太子)の子供だからめっちゃめっちゃ優秀。そんな人が天皇になってしまったら、裏で実権を握るのは難しく蘇我氏の思い通りに行かないよね？そこで、蘇我入鹿はその山背大兄王じゃなくて、舒明天皇の奥さんの皇極天皇を天皇にしてしまったんだ。

山背大兄王からしてみればムカついてしょうがないよね？しかも、実は推古天皇が死んだ時も、山背大兄王は継承候補だったんだけど、その皇位継承をめぐって蘇我蝦夷の推す舒明天皇と対立している。でも、その山背大兄王の支持者が蘇我蝦夷に攻め殺されてしまい、結局舒明天皇が即位しているんだ。だから、山背大兄王からしてみれば面白くない。推古天皇の死後に皇位に就けそうだったのに、蘇我蝦夷に邪魔され舒明天皇が即位し、舒明天皇の死後にも皇位に就けそうだったのに、またしても蘇我入鹿に邪魔されたわけだから。だから、蘇我氏の蝦夷と入鹿という親子にわたって、天皇になれるところを妨害させられているんだ。

ところが妨害はまだ続く。山背大兄王は、その皇極天皇が退位した場合には、今度こそは俺だろうって思っているわけだけど、またしても入鹿による妨害が入ってくる。入鹿としては「次の皇極の後はやっぱ山背大兄王はダメだな〜。次の天皇には蘇我氏と血縁関係にある古人大兄王でいこう〜」って考えていたんだ。…もう嫌がらせにも程があるよね。そのため、不満だらけの山背大兄王だったわけだけど、その山背大兄王の反逆を恐れた蘇我入鹿が、643年にいきなり山背大兄王のいる斑鳩宮に攻め込んで攻め滅ぼしちゃったんだ。まあ、正確には入鹿に攻められた山背大兄王が、自分の住んでいた斑鳩宮で自殺するんだけどね。

<系図>



これに一番ビビっちゃったのが中大兄皇子(舒明天皇と皇極天皇の子)。だって、いいかい？山背大兄王は蘇我入鹿に睨まれ、最終的に攻め滅ぼされちゃった。そして、蘇我入鹿は古人大兄王を天皇后継者に推している。…ということは必然的に「舒明天皇と皇極天皇の子である自分が狙われる」と考えるよね。…それだったら、やられる前にやっちゃまえばいい。そこで645年、その中大兄皇子が中臣鎌足と協力して、朝廷の儀式の際に蘇我入鹿をぶっ殺したんだ。そして、その入鹿の死を知った蘇我蝦夷は自宅に火を放って自殺したんだ。これが有名な乙巳の変(正確には大化の改新とは言わない。大化の改新とは、この後に中央集権国家を確立するために行われた一連の改革のことをさす)。

この事件に関しては相当有名な話だけど、詳しい事件の経過は入試では聞かれないので軽く雑談的に触れよう。この当時の中大兄皇子は「蘇我入鹿に殺される」ってビビっているから、先にぶっ殺してやろうと考えている。一方で、蘇我入鹿も「中大兄皇子が俺のことを狙っている」と気づいているので、どちらも先に殺すか殺されるかでビビっているんだ。だから、入鹿の屋敷もハンパない数の警備兵がウヨウヨしている。それゆえ、中大兄皇子たちからしてみれば、普通に入鹿の屋敷に攻め込んでぶっ殺す…なんて出来る状況じゃないんだよね。そこで、中大兄皇子と中臣鎌足らがどうやって入鹿を殺すか計画するんだ。

そこで、「三韓進調の儀」といって、百済と新羅と高句麗の朝鮮の三国から使者が日本に来て、天皇に挨拶するというイベントを勝手につくったんだ。そうすれば、入鹿もその儀式に出ざるをえないから、やむをえず入鹿が出仕してくる。そして、その宮に入る門のところで「今回は天皇も御臨席の儀式なので、刀はご遠慮願います」って刀を没収するわけだ。刀を没収しておけば、入鹿を殺しやす

くなるからね。

その後、その儀式が始まる。天皇に対し、その百済・新羅・高句麗からの国書を蘇我石川麻呂という人物がそれを読み上げる…(ちなみに、この蘇我石川麻呂は蘇我氏の一族だけど、中大兄皇子に味方している側だ)。そして、その蘇我石川麻呂が「本日は天皇様もご機嫌麗しゅう…」と読み上げる。実は、この蘇我石川麻呂が読み上げたのを合図に、中大兄皇子に依頼された二人の暗殺者が入鹿に斬りかかるはずだったの。ところが、あまりにも恐かったんだろうね。だって、天皇のいる場で最高権力者の入鹿を暗殺するんでしょ？だから、ずっと動くことが出来なかったんだ。

そうしたら、逆に蘇我石川麻呂の方も焦ってきて、汗がすっげえ出てきちゃった。「何でなんだよ。この言葉が合図で斬りかかってくれるんじゃないかったの…！？この後の文章なんて考えてもいないよ…。うわ～、どうしよどうしよどうしよ…」ってね。そのため、入鹿も「どうした？声が震えてるぞ？……？もしや、お前ら…！！！」と、暗殺計画に気づいてしまったんだ！もうこうなったらやるしかない！そこで、中大兄皇子が「もう、俺がやるしかねえ！！！」って自ら飛び出して、入鹿に斬りかかって彼をぶっ殺したんだ。そして、皇極天皇に「入鹿は天皇の位を狙っている不届き者だったので成敗いたしました！」って報告したんだ。

こうして入鹿が殺されちゃったわけでしょう？だから、親父の蝦夷も「もう蘇我氏は終わりだ…」って自分の屋敷に火放って自殺するんだ。なお、この時にちょうど蘇我氏の屋敷にあった『天皇記』・『国記』も焼けちゃうんだけどね。だから、入鹿は殺害されて、蝦夷は自殺になっているわけだ。

[C] 大化の改新ーテキスト P8 対応ー

さて、この乙巳の変で蘇我氏を滅ぼしたわけだけど、その時の殺害現場にいた皇極天皇はめちゃめちゃ精神的なショックを受けちゃった。そのため、皇極天皇は天皇を退位することになったんだ。そこで、中大兄皇子は次の天皇として、皇極天皇の弟の孝徳天皇の即位を発表したんだ。こういって「何で中大兄皇子が、天皇に就かないんだよ～」って思うよね？…いやいや、中大兄皇子が自ら天皇に就くわけにはいかなかったんですわ。だって、自分で蘇我氏を殺して天皇に就いたら、まるで自分が天皇になりたいから殺したように思われちゃうでしょ。だから、孝徳天皇を天皇にしたわけ。なおかつ、天皇になると「このような行動をしてはならない」とかいろいろ制約がついてくる。だから、中大兄皇子はあえて天皇にならずに、次期天皇後継者の地位である皇太子として実権を握っていったんだ。そして、この中大兄皇子のもと、これから日本を中央集権国家として強くしていくための改革が行われていくんだ。その一連の改革を大化の改新という。

さて、このような改革を行っていくためには、まずは新政権の体制を決めなければいけない。そこで、新政権の人事を発表したんだ。まず、天皇は孝徳天皇。そして、その次の天皇である皇太子になったのが中大兄皇子。その中大兄皇子と一緒に政治を補佐するのが、左大臣の阿倍内麻呂、それから右大臣の蘇我(倉山田)石川麻呂だ。この蘇我石川麻呂はさっきの乙巳の変で、文書を読み上げてた人だね。ところが、名字から見ても分かるように、この人は蘇我氏の人物。彼はその蘇我氏を裏切ってまで、中大兄皇子に味方したわけ。でも、中大兄皇子からしてみれば、やっぱり蘇我氏の人間だからいつ裏切ったり恨みを持ったりするかわからない。そのため、後に中大兄皇子を殺そうとしてるという嫌疑をでっちあげられて、山田寺で自殺させられちゃったんだ。

それから、内臣って役職に就いたのが中臣鎌足。ただ、実際にはその内臣ってどういう役職かはわかってない。後に出来た内大臣につながる役職じゃないかとも言われてるけどね。そして、最後に国博士。これは政治顧問っていうか、政治相談役などの専門家のこと。その政治顧問に就いたのが、もともと遣唐使だった高向玄理と爰。ところが、この中に南淵請安は入ってない。南淵請安に関しては、乙巳の変の前にすでに死んじゃっていたといわれているんだよね。正誤問題のベタベタパターンなので、こんなもの間違えたら恥だと思っておいていい。

こうした新政府のタレントをちゃんと整えて、改革に乗り出すんだけど、この後には645年の難波長柄豊碕宮へと遷都とか、646年の改新の詔、647年と648年の淳足柵・磐舟柵設置と立て続けに政策が行われているよね。でも、何でそんなに急ピッチで政策を行わなければならなかったのか？こゝまで改革を急ぐには、それなりの理由があるはずだよね。それには、やはり国際関係が影響していたんだ。

先ほども述べたように、618年に隋が滅んで唐が出来上がった。そして、その唐は自分に従わない高句麗への遠征を計画し、その準備を着々と進めていた。だから、もう高句麗からしてみれば、めちゃくちゃビクビクもんなんだ。…にも関わらず、その当時の高句麗の国王や貴族の連中は「ど～しよ～、ど～しよ～、唐が攻めてくるよ。ど～しよ～、ど～しよ～」って何も対策立てることができなかった。そのため、これに業を煮やした高句麗の泉蓋蘇文^{せんがいそぶん}という人物が、その国王・貴族らにブチ切れて「それなら、俺が強くてやる」ってことで、国王・貴族ら100人を宴会でぶっ殺してクーデターを起こしてしまったんだ。そして、この泉蓋蘇文が専制的に政治を行っていったって、集権的な国家へと国を強化していったんだ。

でもね？唐と高句麗が戦争になったら、絶対に新羅も百済も巻き込まれるよね？しかし、新羅の方は前もって国家体制をしっかり整えていたから良かったんだけど、百済の方は高句麗と同じで全然国家体制が整えられていなかった。そこで、その百済でも高句麗と同じように、義慈王^{ぎじおう}という王様が反対派の貴族たちを全員追放してクーデターを起こしたんだ。そして、百済でもこの義慈王が専制的に政治をやっていき中央集権的な国へと移行していったわけだ。なお、この二人の人物は完全に早慶(特に慶應)レベルだけど、流れを理解するために必要な個所なので教えておいただけだ。

でも、高句麗と百済って随分似たような国だよな？それぞれ泉蓋蘇文と義慈王がクーデターを起こして国を強化しようとしたわけだからね。でも、さすがに一国で独立して唐と戦っていくのは無理がある。そこで、このクーデターが起きた国同士の高句麗と百済が同盟を結ぶんだ。そして、二国で一緒に新羅を挟み撃ちにして攻めてしまおうと考えたんだ。

これには新羅もやばい。さすがに二つの国に北と南から挟まれて攻められたら滅ぼされてしまうよね。こうなったら、もう背に腹は変えられない、「敵の敵は味方」だ。そこで、唐に同盟を結ぼうと持ちかけて、ここに唐と新羅が同盟を結ぶことになったんだ。これによって、唐・新羅 VS 高句麗・百済って構図が出来上がったわけだ。

そして、644年に唐がついに高句麗遠征を実行に移す。一方で、新羅は百済に攻め込む。これが644年から始まったわけだ。だから、めちゃめちゃ東アジアの国際情勢が緊迫しているでしょ？そこで、日本もこうした東アジアの情勢にいち早く対応できるように、645年に今までの飛鳥から難波長柄豊碕宮^{なんばながへ豊碕宮}へと遷都したんだ。今までの飛鳥っていうのは大和国(現在の奈良県)にあった。奈良県だと情報をゲットするのが遅くなってしまうよね。そこで、難波という港に近い摂津国(現在の兵庫県)の難波長柄豊碕宮へと遷都したわけだ(ちなみに、こうした642年頃からの朝鮮半島の緊迫に対し、日本国内では権力回復が図られ、蘇我氏と大王家による対立が起きた。それが蘇我入鹿が山背大兄王を殺害した事件である。また、唐が高句麗に攻め込んだのが644年であり、これにより朝鮮半島ではさらに情勢が緊迫した。そのため、その翌年に乙巳の変が起きた)。

このように、この当時の日本は如何に東アジアの情勢に対応するかが重要だったわけだ。そのために、日本でもちゃんとした国家体制を確立することが重要だったんだよ。そこで、これからは日本という国をちゃんと強くしていくぞってことを示すために、日本で初めて大化^{たいか}という元号を用いるようになったんだ。ほら、今までの史料とかでは欽明天皇13年とか推古天皇20年とかいっていたでしょ？つまり、今までの日本には昭和・平成などの元号と呼ばれるものが存在しなかった。そこで、これからは日本という国を確立していくために、日本自らの元号をつくったわけだ。

でもね？これから国の体制を確立していきますよ～ってのはわかるけど、その他の豪族たちからしてみれば、実際にはどういう風に改革していくのかわかんないでしょ。そこで、その翌年の646年に

「これから、日本をこんな感じに改革していきますよ」っていう政治方針を発表したんだ。それが改新の詔だ。さて、この改新の詔に関しては全部で4カ条あるんだけど、まずは①の一カ条の公地公民制から説明していこう。これはよく聞く言葉だね？でも、実際にはこれがどういう意味なのかわかってない子が多いんだよね。そこで、簡単に解説していこう。

そもそも公地公民制になる前の土地制度は私地私民制と呼ばれるものだったんだけど、これは何だったか覚えてるかな？ヤマト政権の支配体制のところで説明したけど、簡単にいうと大王は大王で屯倉という直轄地と子代・名代という直轄民を支配していて、豪族は豪族で田荘という私有地と部曲という私有民を支配しているという体制だ。つまり、わかりやすく言えば今現在と同じ。君たちは君たちで、自分の土地を持っているでしょ？それと同じ。大王は大王で自分の土地と民を支配し、豪族は豪族で自分の土地と民を支配しているわけだ。

…でも、大王は大王で、豪族は豪族で土地と人民を持ったらみんなやりたい放題でしょ？結局それぞれの存在が土地と民を支配している状況では、それぞれが権力を持てしまい地方分権体制のままにすぎないんだ。政府としては一刻も早く中央集権国家へと移行したいわけだから、こういった私有地や私有民などは全て廃止しないとならない。そこで、これからは全ての土地と人民を国家が所有すると発表したんだ。それが公地公民制（「公地公民制」の「公」とは「国家」のことをさす。つまり、土「地」も「公」の国家のものとし、人「民」も「公」の国家のものとするというのが公地公民制の意味だ）。

こうして土地も人民も全て国家のものになる。でも、そんなことされたら絶対豪族たちはブチ切れるよね？「なんで俺様の土地と人民が没収されにやアカンのじゃ、ボケエ！」ってなるでしょ？そこで、「わかった。わかった。君たちが文句言うのもわかる。君たちは今まではずっと自分の土地を支配して、そこから収入をゲットしていたわけだけど、それが廃止されちゃったら生活できなくなっちゃうもんね。じゃあ、これからはその代わりとして国家から給料を支給していつてあげよう」ってことにしたんだ。つまり、豪族たちは自分の支配していた土地・人民はなくなるわけだけど、国家から新たに給料を支給されるようになるわけだね。そこで、上級豪族には食封、下級豪族には布帛という給料を支給するようにしたんだ。

さて、このように、豪族に給料を支払うためには、その財源を確保するための税金を徴収する必要がある。そこで、3カ条目の班田収授法・戸籍・計帳や、4カ条目の新税制を確立したんだ。まず、前者の班田収授法に関して簡単に説明しよう。そもそも、国家は国民たちから税金を徴収するわけだけど、人民には土地がない。なぜなら、公地公民制になったことで、全ての土地は国家のものとなってしまっているから。人民も土地を持っていなかったら、何も生産することができないし、税も納められないわけがないもんね。そこで、採用したのが班田収授法だ。これは、簡単に言うと、土地を持っていない人民に対し、国家が口分田と呼ばれる田んぼを貸してあげる制度（貸し与えた人間が死んだ場合はその土地は回収することになる）。この土地を班給することを班田といい、死んだ場合に土地を回収することを収授という。

そして、人民に口分田を貸し与えて、そこから税金を徴収するわけだ。じゃあ、田んぼを貸したり税金を徴収するのなら、ちゃんとその人民たちの身元がわかるような帳簿を作っておかなきゃまずいよね。そいつが誰なのかもわからずに口分田をあげたり、税金を徴収するわけにもいかないでしょ？そこで、戸籍や計帳という、人民の名前や年齢・性別・住所などが詳しく書かれた帳簿を作ったわけだ。ただし、この班田収授法に関しては「律令国家の諸制度」で詳しく説明するのでそちらを参照してほしい。

そして、その税金を徴収するために、4カ条目にあるような新しい税制度を確立したんだ。その税金としてかけられたものが田の調（畿外の国を対象としてかけられた税）と戸別の調（畿内の国を対象にかけられた税）の二つ。まあ、頻度としては低いけどね。

それでは、最後に残っている2カ条目の地方行政区画について。これは地方制度について定めたもののなんだけど、ここでは細かく問われない。できれば僕としても、今説明してあげたいんだけどそれは無理なんだ。なぜかという、実はそもそもこの改新の詔自体の存在がちょっと怪しいから。この改新の詔自体は646年に出されたのは確かだろうって言われている。でも、実際にこんな大改革が646年にすぐ行えるわけないでしょ？例えば、公地公民制を考えてみてごらん？こんな全ての土地を国家のものとするなんていう政策をやられたら、豪族は絶対反対するよ？それから班田収授法。戸籍・計帳を作るっていっても、そうした住所・名前・年齢などを全国的に把握しなければいけないわけでしょ？だから、この戸籍・計帳を作るとなるとめっちゃくちゃな時間がかかるわけだ。

だから、実はこの改新の詔ってのは今すぐ実施できるようなものじゃなくて、未来予想図、もしくは青写真みたいなものだったんだ。だから、こうした内容は、後の大宝律令が制定された頃によりよく整えられる。それゆえ、この当時は制度自体なにも整っていないので、ここで説明するのは不可能なわけだ。

㊦ 改新の詔『日本書紀』

(大化)二年春正月甲子の朔、賀正の礼畢りて、即ち改新の詔を宣ひて曰く、
其の一に曰く、昔在の天皇等の立てたまへる子代の民、処々の屯倉、及び、別には臣・連・伴造・国造・村首の所有る部曲の民、処々の田莊を罷めよ。仍りて食封を大夫より以上に賜ふこと、各差有らむ。……
其の二に曰く、初めて京師を修め、畿内・国司・郡司・関塞・斥候・防人・駅馬・伝馬を置き、鈴契を造り、山河を定めよ。……
其の三に曰く、初めて戸籍・計帳・班田収授の法を造れ。……
其の四に曰く、旧の賦役を罷めて、田の調を行へ。……別に戸別の調を取れ、一戸の資の布一丈二尺とす。
(大化二年正月甲子(646年)1月1日、新年の儀式が終わってから、改新の詔を宣布し、次のように言われた。
その一、昔から代々の天皇が設置した子代の民、各地の屯倉、および他には臣・連・伴造・国造・村首などの諸豪族が所有していた部曲の民や、田莊などの私有地・私有民を廃止せよ。そして、食封を上級官人の大夫以上の者に与えよ。
その二、はじめて京師(都。難波長柄豊碕宮のこと)の制を定め、畿内・国司・郡司(改新の詔が出された当時は「郡」ではなく、「群」の字が用いられていた)や関塞(関所)・斥候(辺境防備の施設)・防人・駅馬・伝馬を設置し、鈴契(駅鈴・関契)を造り、地方の行政区画を定めよ。
その三、はじめて戸籍・計帳・班田収授法を作れ。
その四、旧来の租税や労役の制度を廃し、田に課する調(税の制度)を行え。……また1戸ごとに調を徴収

さて、こうした政府の政治方針を発表して、これ以降中央集権国家を確立していく。じゃあ、なぜこうした中央集権国家を確立していこうとしたのか？それは、さっきから述べているように朝鮮半島が緊迫しているからだったよね。こうした情勢に対応するために、国家体制を整えていこうとしたわけだ。

ところが、いざ新羅や唐とかと戦う羽目になった時に、日本で朝廷に抵抗する可能性の奴等がある地域にいた。それが東北地方で未だにヤマト政権に服従しない蝦夷という奴等だったんだ。だから、もし唐と戦争する時になって、蝦夷が国内で暴れたりしたら堪ったもんじゃないよね？そこで、こういった蝦夷が攻めてきても大丈夫なように、越後国(現在の新潟県)に砦を作っておいたんだ。それが647年の淳足柵と648年の磐舟柵。

これら淳足柵と磐舟柵を造ったわけだけど、この二つは柵といってもバリエードのようなものじゃなくて、ちゃんとした砦なんだ。そして、この砦を拠点にして、658年に阿倍比羅夫という人物を派遣して蝦夷征討を行わせ、秋田・能代に住む日本海側の蝦夷を服属させたわけだ。そうしたら、この服属させた蝦夷の奴等が、今度は自分たちと対立している上の方にいる肅慎という部族も倒してほしいんすよ、と頼んできた。そこで、北海道南部の渡島半島にまで渡り、肅慎っていう奴等も平定したんだ。ただし、この阿倍比羅夫の征討に関しては時期がずれているので気をつけるように。淳足柵と

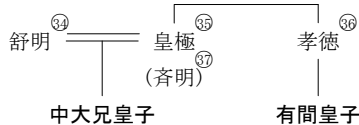
磐舟柵が設置されたのは孝徳天皇^{こうとくてんのう}でいいんだけど、この658年の蝦夷征討が行われた時の天皇は齊明^{さいめい}天皇だからね。

ところが、こうした政策を進めていった中大兄皇子なんだけど、それに不満な人物が一人いた。それが孝徳天皇。だってそうでしょ？孝徳天皇からしてみれば、何で俺が天皇なのに、みんな中大兄皇子の言うことばかり聞いて俺には何の実権はないんだよ、って不満になってくる。そのため、徐々に中大兄皇子と孝徳天皇の仲が悪くなっちゃって、「ああ、いいよ。そんなに俺のこと嫌いなら俺は昔の飛鳥に戻るから」って中大兄皇子が飛鳥に戻っちゃったんだ。

でも、中大兄皇子だけ飛鳥に戻るならいいよ？ところが、自分の姉である皇極天皇も、しかも自分の奥さんまで「中大兄皇子が飛鳥に戻るなら私たちも戻ります」って皆飛鳥に行っちゃったんだ。だから、孝徳天皇一人だけ難波長柄豊碇宮に取り残されちゃったの。…超寂しいよね、この人。そうした寂しさのためか、その翌年に孝徳天皇死んじゃうんです。

そのため、孝徳天皇の死後、皇極天皇が再び天皇に就いて、齊明天皇^{さいめいてんのう}と名乗ったんだ。でも、ちょっと不思議に思わない？孝徳天皇が死んだのだったら、すでにワンクッションおいているんだし、皇太子である中大兄皇子が天皇として即位すればいいでしょ？ところが、中大兄皇子は即位せずに、中大兄皇子の母の皇極天皇が再び天皇に就く重祚して、齊明天皇として即位することになった。この理由は下の系図を見てみるとよくわかるんだ。

＜系図＞



中大兄皇子にとって、孝徳天皇が死んだのは自分が即位するのに好都合なことだけど、この孝徳天皇には有間皇子^{ありまの皇子}っていう子供がいるでしょ？天皇の息子だから、当然有間皇子も有力な天皇候補だったんだ。だから、ここで皇位継承争いを起こすのもまずいし、政治的な緊張を緩和するために間をとって自分の母である皇極天皇にもう一回即位してもらったわけだ。

じゃあ、中大兄皇子が今後天皇になるにあたって一番邪魔なのは誰だろう？もちろん有間皇子だよ。そこで、この有間皇子のもとに蘇我赤兄という人物を送り込んで、謀叛を起こさせるように仕向けたんだ。その結果、蘇我赤兄にそそのかされてしまったため、有間皇子は謀叛の罪で処刑されることになってしまったんだ。まあ、超難関私大レベルのお話だけだね。

〔D〕白村江の戦いーテキスト P9 対応ー

さて、話を国内から国外の話に戻そう。先ほど〔C〕大化の改新の箇所、朝鮮半島では「唐・新羅」VS「高句麗・百済」の形で戦争が起きていたのは説明したよね。この東アジアの緊迫した情勢が、この時期に急展開するんだ。

この朝鮮半島の戦乱は唐が高句麗に攻め込み、新羅が百済に攻め込む形で続いていたよね。唐は644年から高句麗遠征を行っていたんだけど、さすがは高句麗。あの隋が高句麗を滅ぼすことができなかったように、唐でさえも高句麗を攻め滅ぼすことはできなかった。だから、高句麗とガチンコで戦争しても勝つのは難しいので高句麗遠征は中止。そして、いきなり攻める方向を転換して、新羅と共に百済へと攻め込んだんだ。戦の鉄則っていうのは、まずは弱いものから倒した方が手取り早いからね。そこで、唐・新羅の連合軍が百済へと攻め込んだわけだ。

その結果、挟み撃ちにされた百済は都の泗沘城^{しじよう}(現在の扶余^{ふよ})が落とされ、百済王の義慈王も捕えられて殺されてし

まったんだ。これが660年の百済滅亡。ただし、これは都の扶余と王様の義慈王が死んだだけで、他の都市とかではまだ家臣とかが頑張ってゲリラ的な抗戦を続けている。つまり、百済が滅びたとは言っても、首都が落とされ王様が殺されただけで、家臣たちはまだ生きているわけだ。だから、その家臣であった鬼室福信という人物が日本に使者としてやってきたんだ。

「我が国、百済の義慈王は確かに死んでしまいましたが、家臣はまだ生き残って戦っております。ですので、義慈王の代わりを即位させれば百済は再興することが可能です。幸いにも、この朝鮮半島の戦乱が起きる前に、百済が日本に人質として預けていた義慈王の息子の余豊章が日本にいます。ですので、彼を返していただき百済を再興したいのです。そして、百済を再興するためには、それなりの軍隊が必要になります。そこで、もし再興に成功したら百済は日本の服属下に入りますので、日本から救援軍を派遣してもらいたいのです。」

日本からすると、百済は今まで仏教や儒教などを伝えてもらったり、友好関係を築いていた国だ。なおかつ、百済再興に成功すれば日本が昔もっていた朝鮮半島に対する影響力も回復することができる。そこで、翌年の661年、斉明天皇・中大兄皇子は百済復興のための救援軍を派遣するために、九州へと向かったんだ。ところが…。その九州に着いて「さあ、今から朝鮮半島だ!」という矢先に、斉明天皇が筑紫朝倉宮という場所で亡くなってしまったんだよね…。

さあ、天皇が死んでしまったから、また次の天皇が問題になってくる。「そんなん、もう中大兄皇子が即位すればいいじゃん」って思うでしょ?でも、そう簡単にはいかないんだよね。天皇候補の有力者はもはや中大兄皇子しかいないけど、中大兄皇子が即位したら、それに反対する勢力が出るかもしれない。今は百済を復興させるために戦わなくちゃいけない重要な時期だ。そんな時に天皇即位に関する対立が起きてしまったら、一枚岩になって戦えないでしょ?そこで、中大兄皇子はあえて天皇は就かずに、皇太子のまま政治を行ったんだ。こうした天皇に即位しないまま政治を行うことを称制という。

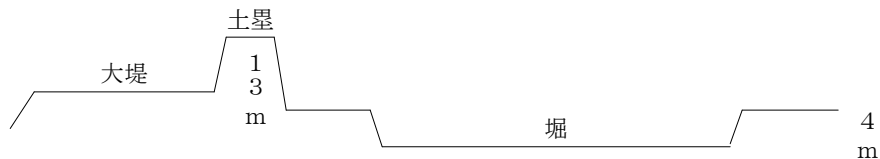
そして、中大兄皇子称制のまま、百済を再興させるため、663年に朝鮮半島南西部の錦江河口で唐・新羅の連合軍と戦ったのが白村江の戦い(白村江とも読む)だ(ごく稀に白村江の戦いを斉明天皇 or 天智天皇時と記している参考書があるが、それは完全な誤り)。ところが、この時の日本軍は豪族らが個人個人で出し合った完全な寄せ集めの軍で、作戦・指揮系統もめちゃくちゃだったので、結局唐と新羅の連合軍にボロ負け。白村江が日本軍の血で赤くなったと言われるぐらいの大敗だったからね。

こうして日本軍は無残に負けて帰ってくるわけだけど、その兵士を出した豪族は相当ムカついている。なぜなら、兵隊を出したのは自分たち豪族。にも関わらず、それを指揮する朝廷の連中はロクに統制できない状態で、兵力を失うことになってしまったわけだから。だから、中大兄皇子からしてみれば、まずはどうにかしてこの豪族の不満を解消しなくちゃいけなかったんだ。そこで、664年に出されたのが甲子の宣というものだ。これは646年に出された改新の詔で、曲がりなりにも廃止するといった豪族の部曲を復活させるというもの。豪族は豪族は不満タラタラなわけだから、この部曲をもういっかい復活させてやれば豪族の不満も少しは解消するでしょ?そこで、民部・家部という結局は以前の部曲を復活させたわけだ。ただし、これも超難関私大レベルの内容だけどね(なお、その後部曲は文武天皇時の675年に廃止されることになる)。

でも、これだけじゃあ済まないよね。なぜなら、唐と新羅と戦ってしまったわけだから、その後に唐と新羅が日本に攻め込んでくるかもしれない。そこで、攻められることを想定して、国の防備を固めたんだ。それが九州に配備された兵隊の防人や、敵が来たらすぐに知らせることができるように狼煙として設置された烽火だ。なお、白村江の戦いで西国の人々が動員されたので、防人として配備されたほとんどの人々は被害が少なかった東国の人々だった)。でも、兵隊だけでなく、攻め込まれた場合に守るための拠点となる施設も造っておかないと。それが水城と朝鮮式山城だ。まず、水城というのは筑紫国に設置されたお堀みたいな城。これは下の図のように、4mくらいの堀があって、

その奥に高さ13mの土塁があり、これは1km近く続いているんだ。つまり、唐や新羅が日本に攻め込むためには堀を越えなくちゃいけなくて、その堀を渡っている間に、土塁から弓矢などで攻撃を仕掛ければいいというわけだ。

＜水城＞



それに対して、朝鮮式山というのはそのままの城。ただ、それを滅亡してしまったため日本に亡命してきた百済人が建設したので「朝鮮式」山城と言うわけだ。この朝鮮式山城として特に有名なのが、大宰府の南方に造られた**大野城**、そしてそれ以外にも**基肆城**や飛鳥の高安城なんていうものがあるんだけど、大野城さえ知っていればいいね。それ以外は超難関私大でも全然聞かれないしね。でも、こういった九州の各施設が落とされて、都にまで攻め込まれる可能性もあるかもしれない。そこで、都を出来るだけ難波などの畿内の港から遠い**近江国**(現在の滋賀県)の**大津宮**に遷都したんだ(他にも理由は諸説ある)。

＜白村江の戦い後の朝鮮＞

ところで、白村江の戦いのあと朝鮮半島はどうなったのか？日本は唐・新羅の来襲に備えていたけど、実際に唐と新羅が攻め込んでくることはなく、むしろ唐と新羅が対立するようになっていったんだ。では、何故そのような形になったのかを説明しよう。

白村江の戦いで日本が敗れたことによって百済の再興はかなわなかったわけだから、唐と新羅の敵は高句麗しかないよね。そこで、唐と新羅が共同で攻め込み、**668年**に**高句麗**を滅ぼしたんだ。ところが、唐は朝鮮半島の征服を目指していて、一方の新羅は朝鮮半島の統一を目指している。そのため、今度はその唐と新羅のどちらが朝鮮半島を支配制するかで対立していくことになったんだ。ほら、もともとこの二国は、百済・高句麗の連合軍に対抗するために手を組んだだけだったよね？だから、百済・高句麗が滅んだ今は、どちらが朝鮮半島で覇権を有するかで対立していくわけだ。

さて、唐とのガチンコ勝負に挑むことになった新羅なんだけど、新羅には一つやっかいな存在の国がいた。それが実は日本なんだ。新羅からしてみれば、もしも日本が唐と手を組んで、新羅に攻め込んできたら新羅だってイチコロだよな？だから、新羅としては、唐と戦うために、まずは日本と仲良くしておかなきゃまずい。そこで、日本に使者を送って通交を求めてきたんだ。

でも、まあずいぶん都合が良すぎるよね～。だって、日本からすれば、日本と友好関係だった百済を滅ぼして、白村江の戦いでも戦ってくるくせに、今度は自分がピンチになったら仲良くしようって言うてきてるわけだから。そう、ムシが良すぎるわけだ。でも、もちろん新羅もそういう感情を日本が持っているのは百も承知。そこで、条件を出してきたんだ。

「日本のお気持ちは重々承知しております。ですので、我ら新羅は日本に臣下の礼をとり、毎年貢物を持って朝貢致しますから。それから、朝鮮半島の情勢とか、中国文化など様々なものをお教えしますよ」と言うてきたんだ。これは少しオイシイんじゃない？新羅が日本に従属化する形をとれば、長年の目標である朝鮮半島にも影響力を及ぼすことができる。そこで、日本はそれをオッケーすることにしたんだ。

この結果、**新羅**は見事**676年**に唐の勢力を追い払って朝鮮半島を統一することに成功した。そして、日本は新羅を通して唐文化などゲットするために、**遣新羅使**という使者を派遣して、文化や情報などを入手していったんだ。それゆえに、その当時は新羅と仲良くしていたため、**天武天皇・持統天皇**時には遣唐使の派遣が行われていないんだ。

[E] 壬申の乱ーテキスト P9 対応ー

これで、都も決まったし白村江の戦い以降の動揺も一段落ついたね。そこで、ようやく中大兄皇子が正式に天智天皇として即位したんだ。そして、本格的に政治に取り掛かっていくわけだけど、さて天智天皇はどういった政治を行いたかったの？

645 年以降、天智天皇は大化の改新と呼ばれる一連の政治大改革を行っていったけど、それはすべて中国のような中央集権国家にしたいからだったよね。これまでは、朝鮮半島の情勢が緊迫していたせいで実行に移せるような状況じゃなかったけど、ようやくこの時期になって中央集権国家の建設に本格的に着手するようになったんだ。

そこで、法律を基にして政治を行う律令国家を作り上げるために、668 年に中臣鎌足に命じて近江令という法律を作らせたとされているんだ(ただし、近江令は現存しておらず内容も不明なものが多く、存在自体も疑わしい)。でも、よっぽどその事業は大変だったのかもしれないね。その編纂の中心となった中臣鎌足は翌年の 669 年に死んでしまったの。そのため、天智天皇も中大兄皇子の頃から共に頑張ってきた彼に大織冠という名誉職と、藤原という名字を与えたんだ。だから、中臣鎌足は別名、藤原鎌足とも呼ばれるわけだね(その鎌足の子が藤原不比等)。

<律令国家>

律令国家というのは律令格式に基づいて政治を行っていく国家のこと。そして、律令格式というのは、簡単に言えば法律のことなんだけど、具体的にはよくわからないよね。まず、そもそも律令格式とは、「律」・「令」・「格」・「式」の 4 つに分けられるんだ。

「律」とは古代の刑法にあたるもので、「令」とは古代の行政法・民法にあたるもの。これらの律令は 701 年に刑部親王・藤原不比等によって編纂された大宝律令と、718 年に藤原不比等によって編纂され、757 年に藤原仲麻呂によって施行された養老律令によって体系づけられたんだ。

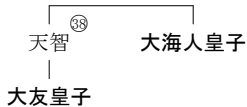
でも、これら律令というものが作られたのは 701 年や 718 年のお話。その後の時代にも状況の変化に伴って、様々な法律が制定されたりしていくよね。こうした 701 年、718 年の律令制定後に制定された法律は「格」というんだ。例えば、723 年に制定された三世一身の法(養老 7 年の格)や、743 年に制定された墾田永年私財法(天平 15 年の格)などがあるんだけど、これらは「〇〇年の格」という言葉がついているように、律令制定後に制定されたから「格」という名称を用いているわけだ。一方、「式」というのは「律令格」とは少し違うもので、これら律令格の施行細則を記したものなんだ。つまり、律令格の細かな内容を記したものってことだね。

こうして律令を整えた後は、その律令に基づいて政治を行っていかなければならない。でも、人民を治めて全国的に政治を行うためには、人民を把握しておかなければいけないよね？例えば、人々の名前、年齢、性別、住所などを把握しておかないと徴税も徴兵もできないでしょ。そこで、670 年に最初の全国的戸籍として庚午年籍が作成されたわけだ。ただ、実はこの庚午年籍は通常の戸籍とは少し違うんだ。通常の戸籍とは、人々の名前、年齢、性別、住所などを把握しておいて、そこから税を徴収したり、徴兵したりするもの。ところが、この庚午年籍は氏姓を正す根本台帳として作成され、永久保存とされたものなんだ。でも、氏姓を正す根本台帳って、イマイチ意味がわかりづらいよね。具体的に説明しよう。

今までは、戸籍というものの自体が存在しなかったため、人々の身分などを記した記録というものは存在しなかった。だから、昔からの氏や姓で、ウソの姓とかを主張することが出来てしまうわけだ。そこで、氏姓を正しくするために、今までの豪族などの身分を記録しておく戸籍を作ったんだ。つまり、その家系におけるもとの姓を記録して、詐称などをできないようにしたわけだ。だから、この庚午年籍は非常に重要だよね？それだけ重要だから永久保存とされたんだ。

その庚午年籍の制定の翌年、671年に天智天皇が亡くなる。おそらく今までの激動の時代を生き抜いてきたことや2年前に中臣鎌足が死んじゃったことがショックだったのかもしれないね。ここで少し系図を見てみよう。

<系図>



天智天皇が亡くなるわけだから、その次の天皇後継者を決めないといけないよね。その天皇後継候補には、天智天皇の子である大友皇子や、天智天皇の弟である大海人皇子がいた。そして、その当時では天智天皇の弟の大海人皇子の方が有力候補だと言われていたんだ(大友皇子の母は身分的には低い卑母であったため、皇位継承者と思われていなかった)。

ところが、肝心の天智天皇は、次の天皇には自分の息子である大友皇子を就けようと考えていたんだ。これは、別に自分の子供の方が可愛かったからとかいう理由じゃない。彼は、今まで何度か起きていた皇位継承争いが今後起きないように、「天皇の子供が皇位を継ぐ」というルールを作ろうと思っていたんだ。

しかし、大友皇子を天皇に就けるためには、有力候補である大海人皇子が邪魔になってくる。そこで、天智天皇は病床の枕元に、大海人皇子を呼び寄せてこう言った。「弟よ、頼みがある。私は大友皇子を天皇に就けようと考えていたが、やっぱり我が息子は経験が足りない。だから、次の天皇はやっぱりお前がやってほしいんだ」。…実はこれ、天智天皇の本音ではなくまったくの嘘。これは、大海人皇子が天皇になりたいかどうかを試そうとしていたんだ。だから、もし、ここで大海人皇子が「任せてください。私が天皇になります」なんて言ったら、すぐ近くに隠れている暗殺者に殺されてしまうわけだ。

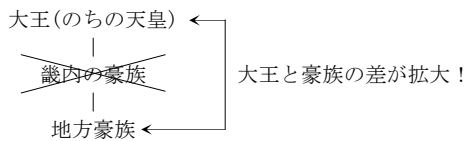
でも、実はその天智天皇が試そうとしていることを大海人皇子は知っていた。この天智天皇のところに来る前に家臣がこっそり教えてくれていたんだ。そこで、「いいえ、お断りします。しが天皇になるより、兄上の子供である大友皇子が即位された方が良いでしょう」と辞退して、殺されないようにさっさと奈良県の吉野へと逃げていったんだ。このまま都にいたら、いつ殺されてしまうかわからないしね。まあ、こうして邪魔者のいなくなった天智天皇は、大友皇子を次の天皇に指名して、安心して死んでいくわけだ(この大友皇子が天皇として即位したかどうかは明らかでないが、江戸時代に徳川光圀が編纂を命じた『大日本史』では皇子の即位を認めている。そのため、1870年に明治天皇から弘文天皇の名が贈られた)。

この後の展開はわかりやすいね。この天智天皇が死んだことによって、大海人皇子と大友皇子の間で争いが起きることになる。それが672年に起きた壬申の乱だ。まず、大友皇子は天皇後継者として、天智天皇が遷都した近江大津宮を拠点として、畿内の中央豪族を味方に引き入れたんだ。一方の大海人皇子は逃がれていた先の吉野で挙兵をして、伊勢(三重県)の鈴鹿関や美濃(岐阜県)の不破関などをまわって、地方豪族を味方に引き入れて反撃に出る。そして、この迂回の過程で大海人皇子の軍勢はどんどん膨れ上がっていき、最終的に大津宮は陥落し大友皇子が自殺したことによって、大海人皇子の勝利に終わったんだ。こうしてこの戦いに勝利した大海人皇子は、672年に大和国(奈良県)の飛鳥浄御原宮という都に遷都をして、天武天皇として即位したんだ。

さて、この壬申の乱がもたらした結果を最後に考えてみよう。この壬申の乱で大海人皇子が勝利したことによって、大友皇子に味方した畿内の中央豪族は一掃され、没落することになる。それに対して、大海人皇子に味方した地方豪族は手柄をたてたとはいえ、もともとの身分は低いのでその出世具

合はタカが知れている。そのため、以下の図のように、大王と豪族の差が大きく拡大することになったんだ。

＜壬申の乱の結果＞



そこで、権威が確立した天武天皇は、中国の皇帝と比べる意味で同じ「皇」を用いて、「大王」から「天皇」へと名称を変更したんだ(また、この時期に日本の国号が「日本」として確立したとされている)。そして、天皇の権威が強くなったことを利用して、天皇と皇族を中心とした皇親政治が行われていくようになったんだ。なお、よく「天武天皇の時期に「天皇」という名称に変更されたにもかかわらず、それまでの欽明天皇、推古天皇などに「天皇」という名称がついてるのはどういうことだ！」っていう質問があるので先に答えておこう。基本的に天皇というのは諡号(いご)といって、死んだ後に贈り名がつけられることになっている。だから、天武天皇以前の天皇も全て諡号というわけだね。

〔F〕皇親政治ーテキスト P9 対応ー

このように、天武天皇が天皇と皇族中心の皇親政治を行っていったことで、天皇の権威は非常に強くなったので、以下の和歌のように、天皇はまさに生きている神である現人神だと考える天皇神格化の歌まで詠まれるようになったんだ。

㊦ 天皇神格化『万葉集』

大君は 神にし坐せば 赤駒の 匍匐ふ田井を 都となしつ (大伴御行)

(大君(天皇=具体的には天武天皇)は神であられるから、赤毛の馬がいるような田園を都(飛鳥浄御原宮)にすることができる。)

大君は 神にし坐せば 天雲の 雷の上に 慮せるかも (柿本人麻呂)

(大君(天皇=具体的には天武天皇)は神であられるから、天の雲の雷の上にさえも、居を構えることができる。)

こうした天皇の権威向上によって、天皇と皇族中心の皇親政治がおこなわれていくわけだけど、そのためには天皇だけでなく皇族の権威も上げなくちゃいけない。そこで、それを定着させるために定められたのが **684 年の八色の姓**だ。これは、昔の氏姓制度で説明した豪族に与えられる「姓」のこと。今までの「姓」は大和地方の有力豪族に与えられる「臣」とか、職掌で仕える有力豪族に与えられる「連」とかがあったでしょ？それを真人(皇族に与えられる)・朝臣(旧臣姓に与えられる)・宿禰(旧連姓に与えられる)・忌寸・道師・臣・連・稻置という 8 つの姓へと改正したんだ。これは偉い順番になっているんだけど、トップの真人を与えられるのは皇族になっているよね？このように、皇族に与えられる真人をトップにもってきて、皇族の権威を向上させようとしたんだ。二番目には旧臣の豪族に与えられる朝臣、三番目には旧連の豪族に与えられる宿禰があり、それ以降の忌寸・道師は難関私大だと書かせることがあるけど、それ以外の臣・連・稻置はあんまり聞かれないよ。

こうして天皇が国を治めていくわけだけど、そうするとその中には天皇による統治に対し文句を言う奴も出てくるかもしれない。そこで、天皇が国を治める正統性を示すために、国史(国の歴史書)を編纂しようと考えたんだ。

その当時には、諸豪族が所有している『帝紀』・『旧辞』という歴史書があったんだけど、その内容

にはかなり嘘や誤りが多かった。この当時なら、どの部分が誤っていて、どの部分が正しいかはわかるけど、後世になったどれが正しいのか誤っているのかわからなくなってしまうかもしれない。そこで、

「正しい」歴史書をつくるために、**天武天皇**は**稗田阿礼**という人物に「この帝紀と旧辞はいずれ正しい内容に作り替えるから、それまでこの内容全部暗記しとけ」と命じたんだ。これが奈良時代に『**古事記**』として編纂されることになるんだけどね。なお、この時期には日本最初の貨幣として**富本銭**という貨幣が鑄造されているんだけど、その理由は後で説明しよう。

このような政策を行っていくためには律令を整備しないとイケない。そこで、**681年**から律令国家として**飛鳥浄御原令**の編纂を開始することになったんだけど、これには非常に時間がかかってしまって、完成する前に天武天皇は亡くなってしまったんだ。だから、**飛鳥浄御原令**が施行された**689年**時の天皇は**天武天皇の皇后**である**持統天皇**時なんだ(天武天皇の後に本来即位するはずだったのは天武天皇と皇后(のちの持統天皇)の子の草壁皇子だったが、同じ天武天皇皇子の**大津皇子**と対立していた。そのため、皇后(のちの持統天皇)は天武天皇の死後、謀反の疑いで大津皇子を自殺させている。しかし、残った皇子の草壁皇子も病気で亡くなってしまったため、草壁皇子の息子である文武天皇が成人するまでの中継ぎとして持統天皇が即位することになった)。

この飛鳥浄御原令という行政法が完成したことによって、これ以降は飛鳥浄御原令に基づいて政治を行っていくことになる。そこで、この**飛鳥浄御原令に基づいて作成された初めての班田台帳**のための戸籍が**690年**の**庚寅年籍**だ。でも、よく「**庚午年籍**とはどう違うんですか？」という質問があるから、先に答えておこう。庚午年籍は今までの身分やその家柄を記録しておくために、永久保存とされた戸籍だったよね？つまり、戸籍の源となっていくもの。それに対して、**庚寅年籍**のかなり異なる。

これから政治を行っていくためには財源、つまり国民から徴収する税が必要になるよね？そのためには、国民に班田収授を行って口分田を班給し、その土地から出来上がったものを税金として徴収しなくちゃいけない。そして、彼ら国民は新しく生まれたりする者も死亡したりする者も多々ある。こうした民衆を把握するために、6年ごとに戸籍を造っていくんだ。その6年ごとに造られる戸籍の最初が**庚寅年籍**なわけだ。

こうして政治が安定して行われていくと、色々やらなければいけないことも増えてきて役人も増えてくる。そうすると、今までの飛鳥浄御原宮じゃ小さすぎて都として不十分になってしまう。そこで、今までの都とは違った大規模な都をつくろうと考えて、**694年**に大規模な**都城制**の**藤原京**への遷都が行われたんだ(遷都を行うためには、多くの労働力・資金が必要になる。そこで、その資金を獲得する目的で藤原京遷都の前に富本銭が鑄造されたのである)。

この藤原京は周りを**耳成山・畝傍山・天香久山**という3つの大和三山に囲まれた場所にあったんだけど、都城制って言葉がイマイチわかりづらいよね。そもそも、今回の藤原京になって初めて「京」という言葉になったのは気づいたかな？今までの都は難波長柄豊碓宮、近江大津宮、飛鳥清浄御原宮にしる全て「宮(宮城)」という言葉が使われていたよね。具体的に言うと「宮(宮城)」っていうのは、天皇の住む御所や政務を行う役所などしかないんだ。それに対して、「京」というのは、寺とか役人や庶民の住む住居がある居住区のこと、その二つを兼ね備えた都のことを都城制という。つまり、「宮」は天皇の住む御所と役所のみ、一方の「京」は御所以外にも役人・庶民の住む住居があるってことだね。だから、それだけ整備された都だから、この藤原「京」はいちいち遷都する必要はなく、天皇何代にもわたって政治が行えるんだ。だから、この藤原京は**持統・文武・元明**の3代にわたって使用されているんだ。